

山村留学と
魚梁瀬地区大運動会



高知県
馬路村



木下 彰二
馬路村役場
産業建設課長

馬路村は、高知県の山奥の小さな村で信号機もコンビニも無い小さな村です。人口は千百人足らずですが、カモシカや夏場限定の鮎君などを含めるとたくさんいます。今回は、その馬路村の中でも更に山奥の魚梁瀬地区の取組を紹介します。

この地区は昔から林業を中心に栄えましたが、木材不況や営林署再編の影響で過疎化が急速に進行しました。昭和61年には485人だった地区の人口は現在では220人にまで減少しました。子どもの数も同様に減少し、魚梁瀬小・中学校の存続が危ぶまれるように



2階の教室から運動場に飛び出せる「魚梁瀬小学校」

なりました。そこで地区の人達を中心に「山の学校留学制度実行委員会」を設立しました。

「山村留学制度」

この山村留学制度は里親制度でなく、家族を丸ごと受け入れる制度で、子ども

だけでなく保護者の方にも地域の活性化に一役買ってもらおうという狙いがあります。募集開始と同時に反応があり、初年度の平成9年には、愛媛県の5家族の子ども10人が留学。ピーク時の13年には、10家族の子ども17人が留学しました。現在は5家族の子ども9人が留学しています。(魚梁瀬小中の全児童生徒の1/3)。地区では、このような長期的な活性化施策の他にも色々な取組を行っています。その

はい!!馬路村の特別住民課です!

馬路村では只今特別村民の住民登録申請を受付けています。

特別村民の特典

- 馬路村村民と同じ気持ちになれます
- 特別村民用の住民票が届きます
- ときどき、村の行事案内が載った、広報誌が届きます
- 来村時に、特別に村長と一緒に村長室でごっくん馬路村が飲めます

他にも色々考え中。登録希望の方は下記項目を入力して返信してください!

<http://www.infor-yoma.or.jp/umaji/>

登録料 無料!

「お山の大運動会」

一つが「お山の大運動会」です。

人口が減少すると、様々な地区の行事も衰退の一步をたどる場合があります。当然、祭り事や地区の運動会もその一つです。そこで地区では、全国に情報を発信し、運動会に「全日本選抜チーム」として参加者を呼び込むという取組を行う事にしました。いわゆる「お山の大運動会」です。平成16年から行っていますが、遠くは京都、大分、広島、愛媛などからも参加が



あります。平成16年には82名、17年には92名、18年には51名の参加がありました。運動会に参加するにあたり、地区では特段バスなどの手配はしません。参加者が自分たちで魚梁瀬までやって来ての参加となります。当日はお弁当を持参で参加する方や、地区にお願いして作ってもらおう方、また、遠方より来てくれる方、中には宿泊されて夜の大交流会にも参加して帰られる方もいます。

運動会の運営は昔から魚梁瀬中学校の生徒がやってくれます。この運動会を開催するに当たって気をつけたことは、来てくれる参加者の方とファイファイ・ファイの関係を大切にするという事でした。運営面で村がバスを出して参加者の利便性を確保して続ける方法もあります。しかし、これでは予算が無くなれば単年度で運営できなくなり、一過性になると考えたからです。

また、この運動会に参加者を募集するに当たり、ターゲットを絞った情報の出し方をしました。村には現在3万人のお客様の登録があり、必要に応じて馬路村

の情報を発信しています。その方を対象に平成16年にアンケートを取りました。その中で「馬路村の行事に参加したい」「馬路村の人と交流をしたい」「お山の運動会に参加したい」という方が、全国に約280名いました。この情報をこの方達に発信し、また地元のマスコミにも協力をお願いしてこの企画をスタートさせました。

運動会を行っていて感じることは、朝は見ず知らずの人同士ですので一体感はありませんが、種目が進むにつれ親近感が湧き、最後のリレー種目などは自分のチームの選手を一生懸命応援する姿が目立つようになります。そして一緒に何かを達成した喜び、心地よい汗、疲れを感じながら「来年は最下位を脱出するぞ！」と約束し帰って行く姿がとても印象的でした。(19年度は10月28日に実施予定)



競技「与作」に出場の全日本選抜チームの選手と応援団

「ファイファイ・ファイ」の関係

このような企画に携わって感じることは、お客様との関係です。あまりにも過

剰にもてなし過ぎてしまうと、また上の要望がきて、結局また上のサービスの提供をしないといけなくなります。けれど田舎のもてなしには限界があります。そうして無理して来てもらったお客様とは、地域での「つもり」違いが双方に起きてしまい、結局は両方が地域の中でうまくいかない事態となります。

田舎の暮らしの中でできることをし、そのことに共感していただける方たちに来てもらう、そのことが長く地域が存続できる仕組みだと思えます。背伸びをしたらいつかまた元に戻ります。背伸びせず、身の丈にあった地域づくり、そのために情報発信をいかにうまく行うかが大切だと感じています。

最後に、私が普段気をつけている十カ条をもって結びにしたいと思います。

- 「脱公務員十カ条」**
- 一・脱過去の栄光人間
 - 二・脱御役所仕事
 - 三・脱指示待ち族
 - 四・脱無いもの探し(人、金、時間)
 - 五・脱専門馬鹿
 - 六・脱既成概念
 - 七・脱空想論者
 - 八・脱5時からだけ元気
 - 九・脱価格競争
 - 十・脱肩書き人間